

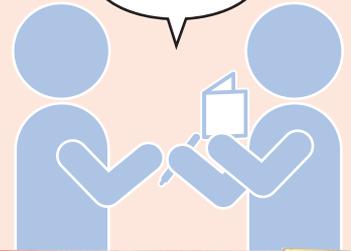
- ① インタビュー(教員編) - 教職教育センター 橘 幸男 教授 -
- ② 新任教員研修 - 学生参加型の授業方法を目指して -
- ③ 学外セミナー
 - ・ボーダレス化する大学とBD
 - ・スランプに陥った2年生を救え

インタビュー

教員編

他の先生方はどのような授業をしているのでしょうか。
 学生に伝えたいことが伝わっているのでしょうか。
 よい「授業」とはどのような授業でしょうか。
 正解はないかもしれませんが
 先生の数だけ授業の“カタチ”があります。

1 NEWS



教職教育センター
橘 幸男 教授

Q1. 授業の特徴・ポイントを教えてください。

「学校教育研究」の講義では、学生間の討論や模擬授業、さらにはロールプレイの手法を取り入れています。将来、小・中・高校の教員を目指す学生たちが受講しているので、個別指導を中心にして、教員としての資質を磨いてもらうように、学生個人の個性を伸ばすように心がけています。

Q2. 先生の授業における「三種の神器」はありますか？

受講人数の多い授業ではパワーポイントを使ったこともあります。学生はそれを写し取るだけで講義を受けたと思うようなので、それはやめました。将来の教員としては、相手の言うことを正確に聞きとる力が大切ですので、重要なことを聞きとってメモをとることを学生には求めています。

また、自分の講義を振り返って、わかりやすい内容であったかを確認するため、時々、録音して反省材料にしています。



Q3. 授業の中で一番大切にしていることは何ですか？

小中高では教員間の協働が重要です。また、教員間、対生徒、対保護者、さらに地域という立場の異なった人たちの言うことを聞きとる力とともに、表現の大切さを知ってもらうことを心がけています。そのため、相手に正確に理解してもらえ文章を書かせる習慣をつけさせています。

Q4. 特に苦勞されたこと、悩まれたことは何ですか？

教員には、教科指導だけでなく、生徒指導が求められます。生徒が抱える多様な問題に対して適切に助言し対応するためには、理屈だけでなく、人間性が強く求められます。学生に幅広い対応力をつけさせることを心がけています。

Q5. 今後改善する必要があると思うことがありましたら、教えてください。(甲南大学として・でも構いません。)

授業アンケート調査を大学が行っていますが、もう少し、授業の中身についての調査項目があってもいいのではないのでしょうか。また調査結果については担当教員しか見ることができないようですが、小中高では、教員間のチームプレイで教育を行っているの、お互いに教育の内容をチェックしあうことを行っています。

Q6. 学生にメッセージをお願いします。

相手を理解することが教員を目指す学生にとってもっとも大切なことです。また表現は自分を知ってもらうことですが、その際、「やさしい」言葉を使うよう心がけましょう。相手に伝わりやすい「易しい」言葉は、相手への思いやりを込めた「優しい」言葉でもあるのです。



◀対談写真

橘先生、お忙しい中インタビューにご協力いただき誠にありがとうございました。

2
NEWS

新任教員研修 2010.12.11. Sat

新任教員と中堅・ベテラン教員のFDワークショップ
～学生も教員も巻き込むインタラクティブな授業法とは～

甲南らしい
FDとは?

学生参加型の授業方法を目指して

教員の講義は一方的に学生に知識を伝えることを中心に行うケースが多いようです。

“Teaching with your mouth closed”

今や学生自身が自ら問題を発見し、そのための対応を考える場をいかに作り出すことができるのが非常に重要な課題となっています。学生たちにグループワークを通じて自らの考えをまとめさせ、学生主体の授業を行うことが求められています。今回は、2つの具体的な方法を教えていただきました。

色々**考えの違い**があった。

第一歩として授業公開!
Share & Change!
を実践していく。

学生の立場になって
考えることの楽しさが体験でき、
教員として授業を組み立てる
アイデアが手に入った。

まずは**学部間の壁を越えた情報共有**
が必要だと思った。



マネジメント創造学部
ジョーンズ・ブレント教授

3
NEWS

学外セミナー

ボーダレス化する大学とBD

大学教育学会 課題研修会
「キャリア形成における大学教育
—ライフサイクルの視点から—
2010年11月27・28日 武庫川女子大学にて

講義や学期、教室など通常の大学空間の「外」での活動が常態化/活発化するにつれて、あるいはデジタル環境が従来型とは異なる「学びの形」を生み出すなかで、「大学のボーダレス化」が進行しています。その現状認識、並びに「長くなった人生」(＝高齢化)や大学教員のライフサイクルといった観点を加えながら、大学教育をロングレンジでながめる必要性が問題提起されました。

大学は今や、「多様な年代の多彩な人びとがライフサイクル全体を通して織り成す、複合的なキャリア形成の場」となっています。「大人の知恵」が求められるこの問題と関わり、FD、SDとともに、大学運営/経営に携わる人たち(Board of Directors)の能力開発、BDが強調されたことが印象的でした。

広域副専攻センター
所長 井野瀬 久美恵

学外セミナー

スランプに陥った2年生を救え

文部科学省GPシンポジウム
「大学教育の質保証に向けた1・2年次の教育のあり方」
2010年12月4日 名古屋学院大学にて

大学全入時代の到来は高等教育のあり方に大きな変革を求めています。学生の学力、学習動機、学習目標および学習習慣が多様化する中、大学教育において卒業までの一貫した教育課程を明確にし、現代社会が求める人材の育成を行わねばなりません。特に、1年次の教育に関しては各大学で熱心な取り組みが見られますが、その後の2年次の教育では学生にも学習疲れが見られます。「2年次のスランプ」を未然に防止することが必要です。

そのため学生主体の教育としては、学生自身が積極的に学習に取り組み、体験を積み重ねる場を提供し、グループで学習効果を高めることに努め、自ら調査を行うノウハウを習得させることが必要です。

EBA 高等教育研究所
所長 渡邊 和俊

これらの詳細については

甲南大学HP 研究所・センター FD FDニュース

こちらから
ごらん頂けます

FDニュースへのご意見、ご感想はこちら
大学企画室
TEL 078-435-2663(内線2810)
FAX 078-435-2306
MAIL kikaku@adm.konan-u.ac.jp